

平日の午後二時。繁華街の裏路地にあるそのお店に、わたくしはコソコソと足を運んだ。

ドアを開けると落ち着いた内装が目に入り、次に銀髪 of 青年の姿が目映る。

黒服に身を包んだその青年はカウンターの奥に立ち、手元でしていた作業を中断させて顔を上げた。

整ったかんばせがわたくしを見てパツと輝く。

その顔から視線を逸らして彼から斜め上の位置にある壁かけ時計を見れば、時刻は予約時間丁度だった。

「いらっしやいませ！」

ニコニコと笑う男性に近付いていくと、ペコリと頭を下げられて頭から生えている黒い角がつやりと光を反射した。

わたくしは男性に向けた視線を再度逸らして、ドアを開いたまま固まっていた体を無理矢理動かす。

そうしてドアを閉じて正面に向き直ると、一步、また一步と前に足を踏み出した。

「え……？」

こちらを見る男の双眸がゆっくりと見開かれていき、遂には紫色の瞳がまん丸に見開かれた。

わたくしはそんな男の顔を見て、ツンと顎を上げる。

「何かしら？」

「い、いえ！何でもございません」

慌てたように取り繕った男は、大変見目の良いインキュバスだ。

わたくしはフンツと鼻を鳴らして腕を組み、視線を左下に落とす。

「ご予約名は……？」

目の前の男から困惑する気配を感じ取るが、そんなのに構ってられない。

わたくしは右手で左腕をトントンと叩きながら、吐き捨てるように己の名前を告げた。

「はい、確かに。ご予約いただいているのはこちらのクロマーですが、お間違いありませんか？」

「その男がホットなのでしょう？なら、何でもいいわ」

わたくしは男が差し出したタブレットの画面を見もせず、ツンと言ひ放った。

予約した相手に拘りは無い。ただ『HOT!』と画像の端に刻印されていたから、ホットなのかなと思って選んだだけだ。

『一番人気!』や二番人気、三番人気もあったが、あまり人気過ぎるとちよつと嫌だったのだ。

「いいから早く通してちょうだい」

再度声をかけると、受付の男は気圧されたようにハイツと返事を
してちよつと跳ね上がった。

それから「畏まりました!」と続けて、いそいそとカウンターの
奥からこちらに近付いてくる。

すぐ傍まで寄ってきて、にへらと笑うインキュバス。

淫魔とも呼ばれる、悪魔の一種だ。

悪魔は狡猾で残忍でふしだらな種族——故郷でそう教えられた。

そんな存在がわたくしの目の前までやってきて、へらへらと笑っ
ている。

（ああ、汚らわしい汚らわしい汚らわしい……!）

こちらですと案内をされながら、こんな店に足を踏み入れること
になるなんてと齒噛みをする。

だが、そうすると決めたのはわたくし自身だ。前を歩く男の後へ着いて行きながら、わたくしはギリツと齒を鳴らした。

男はわたくしのことが気になるのかやたらチラチラとこちらを振り返っている。

そして前を向いたと思えば、黒くて艶々した尻尾をゆらゆらと揺らすのだ。

明らかに話しかけたような雰囲気を醸し出しているが、わたくしは綺麗に無視した。

何故なら悪魔に嫌なことを言われて揶揄われた経験があるからだ。こんな店に来ておいてなんだが、悪魔や淫魔にはあまり、関わらない方が良い。

「こちらで施術服に着替えてお待ちくださいませ」
顎を引いてじつとこちらを見つめる受付の男は、顔に「お話しま

せんか」と書いてあった。

そんなにわたくしみたいな女が珍しいのだろうか。

（――まあ、そうでしょうね）

街に出てから、同族の女性に会ったことがない。

いくら接客業とは言え、このインキュバスも初めて遭遇したのだろう。

彼の後ろでうねうねと蠢く尻尾が、好奇心を露にしていた。

「……フンツ」

わたくしは勢いよく顔を背けて、男の横を通りすぎた。

それから一度も振り返らずに、案内された個室に足を踏み入れる。後ろ手にドアを閉めると、廊下で流れていた音楽は聞こえなくなった。しっかりとした防音が施されているのだろう。

室内は照明が落とされていて薄暗い。

そんな薄暗いところにデデーンと存在するキングサイズのベッド。らぶほてるというところにはテレビがあると聞いたが、ここには無いようだ。

あるのはトイレだろう部屋に繋がるドアと、広々とした空間にあるベッドと、簡易的なテーブルセットのみ。

（なんだか雰囲気……ふしだらだわっ！）

本能的な忌避感に襲われて、わたくしはブルツと震え上がった。

反射的に自分の体を抱き締める。

「……っ」

それでも気確かにもって、よたつきながらクリーム色の寝具に近付いていく。そうしてすぐ傍まで辿り着くと、寝台の隅に何かが置かれていると気が付いた。

何かしらと見やると、それが案内の男が言う『施術服』だと気付く。

（何この、布面積の少ない下着は……!?なんて低能なのっ）

震える手で摘まんで持ち上げたのは、ビキニの布面積を極端に狭めた下着——いや、水着？だった。

これを今から着て、待てというのか。

あり得ない。こんなことがあっていいはずがない。

——しかしわたくしは、やると決めたのだ。

（これも、エリカの気持ちを理解するためだもの……!）

わたくしはビキニを握り締めて、決意を固める。

故郷は秘境とも呼ばれる森の奥地で、同族とのみ共に過ごしてきた。そんなわたくしは今から三年前に、社会勉強のために都会に越してきたのだ。

父の知人が経営するカフェの手伝いをしながら人間や他種族の営みを学び、知見を深める。

その過程で出会ったのが、人間女性の絵里華だ。

彼女はよく笑う明るい女の子で、まだ二十そこそこという若い年齢なのにしっかりしている。

バイトとして職場を同じにする彼女と一緒にウエイトレスとして働いたり、お休みの日には街をブラついたり、映画を観たり。彼女と一緒に居ると、ただただ楽しい。

そんな彼女の唯一容認できないところが——趣味のえっちなお店巡りだった。

なんでもインキュバスが働くお店に行つて、インキュバスと一緒に『寝る』とか。そしてそれが物凄く『気持ちいい』とか、そんなふしだらなことを言っていた。

（でも、でも、あのエリカが夢中になるくらいなもの……！きつと、実際に経験しなければ分からない良さがあるのよ）

素っ裸になったわたくしは涙目になって、布切れとも呼べるビキニを身に付ける。

エリカと一緒に選んだお洋服は、綺麗に畳んで椅子の上に置いた。大好きな大好きなエリカ。

彼女は気が強くて意地っ張りでやたらと虚勢を張るわたくしに、いつもニコニコと笑って接してくれる。

わたくしは彼女が好きなことをきちんと理解したい。

だから、こんなお店に来た。心の底から嫌悪して絶対に近付きたくない、淫魔が働いているお店に。

ここで何をするかは、詳しく知らない。

わたくしが知っているのは下劣な淫魔と一緒に『寝る』ということと、精気を吸われるということくらいだ。

男性と一緒に眠ると子供が出来ると聞くと、そんな感じなのだろう

う。

「ご準備、できておりますでしようか」

「……！」

着替えてベッドに腰を落ち着けた瞬間に、ドアがノックされた。

わたくしは途端に震え出す体をギュツと抱き締めて、それから気合いで震えを止めた。

背筋を伸ばして揃えた足を右に流し、ツンと顎を上げる。

「ええ、どうぞ。お入りになって」

「え？ ああ、はい」

くぐもった低い声が不思議そうに伝えて、カチャリとドアが開く。そこから現れたのは、やたらニコニコとした糸目の黒髪男性だった。

頭には黒くて艶々とした角が二本生えている。しかし受付のイン

キュバスとは違い、先端に金色が滲んでいた。

ペコペコとしながら入ってきて、後ろ手にドアを閉めている。

「どうも〜ご指名頂いたクロマーですう。よろしくお願いしますう」
「うさんくさい……」

妙に間延びした喋り方とやたら甘ったるい声色。

一気に嫌気が差したが、わたくしは腹部に力を入れて耐えた。

「……っ」

しかしカチャリと施錠する音が聞こえた瞬間。わたくしはつい、目を泳がせてしまった。

それに気付かなかった様子のクロマーと名乗った男は、ニコニコしながら歩み寄って来る。しかし寝台から一メートルというところまで来たところで、彼は足を止めた。

チラリと横目で見ると、妙に整った顔立ちが驚愕に染まっている。

開くと吊り目がちな金色の双眸が、まん丸になっていた。

「あれっ？ お客さんエルフ!? えーっ、すご。俺初めて見ましたあ」
「……………」

不躰な物言いに、わたくしはムツと口角を下げた。

なんて失礼なのだろう。わたくしは見世物じゃないのに。

「えー、わー、エルフに指名して貰えたインキュバスなんて俺が初
なんでは？」

勝手に近付いてきた男は、勝手にわたくしの左隣へ腰掛けた。

マツトレスが左に傾いて、わたくしは唇を突き出す。

「あ、えーっとお名前は」

更には勝手にわたくしの名前を呼ぼうとしている。

なんて下劣なの、と怒り心頭になったわたくしはキツと隣のイン
キュバスを睨み付けた。

すると糸目に戻った男が、ポカンと口を開ける。

「名前を呼ぶ許可など出していないわ！わたくしの名前を呼んでいいのは、わたくしが認めた相手のみよ！」

「お、おお……。さいですか……」

高い位置にある糸目を睨み付けて、わたくしはイーツと歯を見せた。

なんて不粹で気が利かない男なのだろう。これだから淫魔は、と心の中で不満を溢して、腕を組んだわたくしはツンと顔を背けた。

「で、では何と呼んだらいいですかねえ……？」

「ふん、それくらい自分で考えなさい。そういう商売でしょう？」

「ふぐう。これは気が強いお姉さんだ」

再度鼻を鳴らして、わたくしは右にある白い壁を見つめた。

横で男がウーンと悩んでいるが、知ったこっちゃない。

「あ、じゃあ。姫さんとかどうです？ 姫っほいしー」

「……………」

わたくしは男から顔を背けたまま、パチパチと目を瞬かせた。

本人は意図していないのだろうが——それはわたくしを言い表すにはあまりにも正しい呼称だった。

わたくしはエルフ王の元に産まれた女兒である。

まさにエルフ族の姫なのだ。

「だめ……………」

「…………駄目じゃ、ないわ」

凄く気まずそうに問いかけられたわたくしは、おずおずと彼に視線を向けて頷いた。

横からホッと息を吐く音が聞こえて、今度はこちらが気まずくなる。今になって己の行動を振り返ると、面倒臭い客そのものだ。

ウェイトレスとして働いていると、嫌な客に遭遇することがままある。

そういう時は大体エルフを引っ掛けようとする悪魔のせいなのだが——それをこの男性にも当て嵌めて、一緒くたにしてしまった。今ではわたくしが迷惑客だ。自分から予約して来ておいて、お店に迷惑をかけるなんて酷い話である。

「……あの、嫌な態度を取ってしまったわ。ごめんなさい」

「おお……っ！ いえいえ、そんなそんなおっ！」

いけないことをしてしまったら、すぐに謝るのが吉よ！——そう教えてくれたのは、友達のエリカだ。

彼女の教え通りに謝れば、クロマーは簡単に許してくれた。

「初めての経験で、動揺されてたんですよねえ♡今日は一緒にたくさん楽しましょーねっ♡」

「……っ、ええ。ありがとう、優しいのね」

しかもクロマーは、こちらの気持ちに寄り添ってもくれている。
下品な言葉を並び立てて揶揄い、お尻を撫でてくる悪魔とは大違
いだ。

わたくしは、インキュバスを下に見ていたことを後悔した。

距離感が近くて軽薄な雰囲気があるが、根は優しい男なのだろう。
でなければ『HOT』と紹介されていないはずだ。

「じゃあ姫さん、そろそろ始めましょ〜か♡キスはしてもいいです
か？」

「……っ、え、ええ……っ」

本当は嫌だけど、エリカはキスが大好きだと言っていた。これも
経験するべきだろう。

ニコツと笑った男が、後ろからわたくしの肩を抱く。

大きくて熱い手。初めて触れる父以外の男性の手に、鼓動がドクドクと暴れ出した。

「目、瞑ってくださいねえ」

「……っっ」

少しずつ近付いてくる顔に怯んで、わたくしは言われた通りにギョツと目を閉じた。

フルフルと勝手に震える体を彼の手が優しく撫でて、そっと抱き締めてくれる。

「ん……っ」

ふにゆりと唇に当たった柔らかい感触。

すぐにはむ、と下唇を挟まれて、ドツキンと鼓動が跳ねた。

「ふ、真っ赤……♡かあわいい」

「や、んっ♡んっ！ん、う……っ」

許可など出していないのに左頬に手を添えられて。それに驚いて
いると、右頬にも手が添えられて顔を上向かされる。

ちう、ちゅう、と音を立てながら唇を吸われ、息を吸うために開
いたところをにゆるりと舐められた。

「あ、ふあ……っ♡あ、んんっ♡」

「……あ、吐息甘い」

甘い空気感に合わせてか、クロマーの口調が砕けた。

そうしてポツリと呟きが落ちたあと、開いた口の隙間からにゆる
りと舌が入り込む。

「んん……ッ!？」

熱くて湿っていてもちもちとした感触が口内に侵入し、歯や内頬
など至るところを舐めていく。

口内に付着してじんわりと熱を発するのは、ほんのりと甘い、彼

の唾液だった。

「ん、ンーツ！」

「唾液も甘っ！すごおっ♡」

思う存分口内を舐め回した舌が、また唇の間をぬるんと擦って出ていった。続いて彼は、ペロペロとわたくしの唇を舐め始める。

すると不思議なことに、唇がじわじわと熱くなっていた。

「ん、ふうっ♡あ、ふあ……♡」

「ふふふ、お耳撫でると顔がトロツとしちゃうねえ♡可愛い♡」

長くて尖っているわたくしのエルフ耳。そこに彼の骨張った指が触れて、縁を辿るようにスリスリと撫でている。

擦りたいのに、妙に心地が良い。

得も言えぬその感覚に耐えるように、わたくしは強く目を瞑る。するとクロマーは、ちゅうっ♡とわたくしの唇を吸った。

——にゅぶぶっ♡ぐちっ♡

「——ン、んんっ！ん、うっ♡」

「ああ♡お口うんまっ♡」

再び口腔内に入り込んだ舌は、先ほどとは違い——驚くほどに長く、それでいて太かった。

もちもちの物体がどんどんと口内に侵入し、やがてわたくしの口は彼の舌でいっぱいになる。

「インキュバスの舌ってね、自在に大きさが変わるんですよ♡」

「あむ、んんむっ！んんーっ！」

わたくしの口内を満たした上でスラスラと喋るのも、インキュバスの特徴で特技だというのだろうか。

どうにか押し返そうとしても、重なった彼の舌の間で自分の舌がにゅぶにゅぶと擦れるだけだった。

「ぐん、くっ♡あ、んんっ♡」

「んっ♡♡」

それどころか前に出したわたくしの舌に、彼の舌が絡み付いて。根本から先端に向けてごしゅごしゅと摩擦され、扱かれる。

「んっ、んくっ♡んあ、んぐっ♡」

わたくしはトロトロと送り込まれてくる甘い唾液を飲み下し、蠢く舌のせいで頬をもごつかせていた。

しつこく舌を扱かれて、喉近くまで侵入したもので口内を隅々までくちゅくちゅと掻き混ぜられる。

「あ……っ♡ん、ぐっ♡んうっ♡」

「いっっぱい飲んでねえ♡ふふっ♡」

喉を鳴らして嚥下する度に、カッと体が熱くなる。

塞がれている口もジワジワと熱くなっていて、疼く口内が舌で

擦られる度に、勝手に体が跳ねた。

必死に鼻で息をする最中、思考に靄がかかっていく。

「あ、う……？」

ドンドンと叩いて、グイグイと手で押していた彼の胸板。

触れる感触が変わっていると思ったら、いつの間にか彼の衣服が消えていた。

脱いだ様子も無いのに——それもまた、インキュバスの特技だと言うのだろうか。

ただただ驚いていると肩を押されて、わたくしの体はゆっくりと倒れていく。

「はう……!？」

「はあ♡♡姫さんのお口おいしく♡ずーっと舐めてたい♡」

ポスリとシーツに触れた背中と、クロマーの後ろに見える天井。

わたくしは呆然としたまま口内を擦られ、送り込まれてくる甘い唾液を飲み下した。

「ぐえ、お、んぶツ」

舌先で咽頭を捏ねられてえずき、漸く正氣に戻る。

そうしてわたくしは、逃げようと蹴き始めた。

しかしその抵抗は呆気ないほど簡単に、失敗で終わる。

それどころかよいしょと足を持ち上げられて、体の位置を調整されて。仰向けの体勢で体格の良い男に覆い被さられてしまったわたくしは、まともな身動きが出来なくなってしまった。

「んっむ！んーッ！」

「姫さんの精氣、ものすっごい美味しいんですけど、これってエルフだから？それとも姫さんだから？びっくりするくらい甘くてもう、びっくりい」

あはは、語彙力死んでるうなんて笑う男がモゾモゾと動いて。ム
ーツと呻くわたくしの足を開いて、出来た空間に腰を入れた。

「嬉しいからたーっぷり唾液あげちゃう♡ゴク、ゴクって沢山の
で、気持ちよくなってねえ♡」

「や、む、ううーっ！」

ただでさえ舌でいっぱいになっている口内に、トロトロと大量の
唾液が送り込まれてくる。

今更ながら嫌な予感がしたわたくしは、喉を閉めてそれを飲み下
さないように気を付けた。

「のーんで♡ほらゴックン♡」

「あ……っ♡」

舌先なのか、そうじゃないのかは分からない。けれど確かに彼の
舌の一部であるものが、また咽頭をまたこちよこちよと擦っている。

「おぐっ♡んぐうっ」

結局えずいた拍子に、わたくしは大量の唾液を飲み下してしまっ
た。

カツと喉が熱くなって、食道と胃も熱くなる。

じんわりと目に涙が浮かび、ビクツと内腿が震えた。

体から自然と力が抜けていき、芯からポカポカと温もっていく。

「あ……。あ……？」

「へへ、インキュバスの催淫体液だよ♡どうー？ エルフの体にも効いてるかな？」

思考に靄がかかっていく。

下腹部には今まで感じたことがない、疼きが生じていた。

焦れるような疼きが強まるのに連れて、視界がチカチカと明滅して
いく。

「お、お……っ♡」

口からぬろりと舌が出ていくのすら、堪らない。

わたくしは焦れ焦れの口内を擦られる感覚に低く呻き、空っぽになつた熱い場所を外気でスースーとさせた。

「ふう、ふう、……おッ♡♡」

妙に寂しい口で必死に酸素を取り込み、物足りなさに自分の舌で粘膜を擦る。そうして走つた刺激にビクリと体を震わした瞬間――

「ん、しょ。おおーっ♡」

わたくしの右胸の上から、小さな布が捲られた。

「乳首しっかり勃ってる♡やったあ効いてそう♡」

「あ、ええ？」

露になつた右胸に、にゅろりと熱いものが触れた。

それはジンジンとしている先端を覆い、にゅぢっ♡と擦り上げる。

「あッ!? あ、やつ、なにッ」

「おっぱい、くりゅくりゅしてるんだよあ♡♡」

乳嘴をこねこね♡クリクリ♡と弄くられて、勝手に腰がビクビクする。その上で足の間がきゅうつと引き攣れて、奥がキュンキュンと熱くなった。

「わ、わかんないっ♡あううっ♡」

「乳首コリコリ気持ちいいねえ♡」

にゆるっ♡くちっ♡にゆる、くちゅっ♡

ねっとり舌で擦られる乳嘴がビリビリとしていて、度々脳天に電流が走る。

未知の感覚にわたくしが困っているのに——目の前のインキュバスは糸目でニコニコと笑い、ゆったりと乳首を擦ってのんびりと喋るばかりだった。